

# 顔真卿書『麻姑仙壇記小字本』拓本一覽稿

宮崎 洋 一

## はじめに

本稿で取り上げる『麻姑仙壇記』は、唐の顔真卿（709～785年）が、撫州刺史だった大暦3年（771年）4月に撰書したものである。撫州は、現在の江西省臨川市に当たり、管轄下に麻姑山が入っていた。その内容は、女仙人の麻姑の事績と麻姑が仙道修行をした麻姑山の仙壇について記したもので、特に前半は、葛洪の『神仙伝』を引用するが、現行の『神仙伝』は、唐代に手が加えられたとされる疑問の書籍で、本稿で取り上げる顔真卿の記文の引用とはずれがある。さらに、記文の内容は同じであるが、顔真卿の書としては、字の大きさによって、大字本・中字本・小字本の3種が知られている。

本稿で取り上げる『麻姑仙壇記小字本』は、「南城本」と呼ばれる刻本が貴ばれてきたけれども、顔真卿の書の代表作として取り上げられることは必ずしも多くはなかった。しかし、近年、影印によって、多くの拓本が紹介されるようになってきている<sup>(1)</sup>。本稿は、これまでに影印された、主な『麻姑仙壇記小字本』の拓本の特徴を整理しておこうとするものである。

## 主な『麻姑仙壇記小字本』の拓本一覽

『麻姑仙壇記小字本』は、1行に書かれた「有唐撫州南城縣麻姑山仙壇記顔真卿撰并書」の題・署名を含めて46行、1行20字で書かれており、本文は反復符号による繰り返しを改めて数えるならば、全部で882字から成る。

およそ縦 15.6 cm、横 34.5 cmの中に、一辺が 1 cmにも満たない小字によってびっしりと書き込まれている<sup>(2)</sup>。本来は、横広く書かれていたが、拓本を装丁する際に数行ずつに分けて貼り込まれているものもある。

現存する拓本の中で、最も古いと思われる拓本は「南城本」と呼ばれるものであるが、すでに第 22 行目の一番下から第 45 行目のちょうど真ん中にかけて左上方に向けての大きな損裂があり<sup>(3)</sup>、また、この他にも目立つものとして、第 33 行目の一番上から第 45 行目の 3 字目にかけて左下方に向けての損裂や、第 2 行目から第 5 行目の一番下一帯の損裂がある。以下、①～⑦がこの南城本の系統に属する拓本と考えられるが、この中の最も古い拓本でも、原刻からの拓本であるかどうかには問題がある。さらに⑧以下は、別に作られた翻刻本である。

以下、影印から見られる特徴について、整理しておきたい。

#### ① 三本合装本 A

清の何紹基(1799～1873年)の旧蔵で、アメリカの安思遠(R.H.Ellsworth)蔵とされている拓本である。『麻姑仙壇記小字本』の拓本三種を合わせて一冊とした中の一つ目の拓本で、7行ごとに分けられて装丁されている。三本合装本は、まとめて下記の3書、

『麻姑仙壇記三本合装』有正書局、1915年

『安思遠蔵善本碑帖選』文物出版社、1996年、pp.76-79

啓功・王靖憲主編『中国法帖全集』第16冊、湖北美術出版社、2002年、pp.295-307

に影印されている<sup>(4)</sup>。

字が少し痩せた部分もあるが、損裂部分も小さく他の拓本に比べて字が欠けていないし、何よりも字に余韻がある。現在見られる拓本の中では、最も佳い状態を残していると思われる。

#### ② 中国国家図書館蔵単帖本 A

清の黄易(1744～1802年)旧蔵の単帖本で、11～12行に分けて装丁されており、

『中国国家図書館碑帖精華』第8巻、北京図書館出版社、2001年、

pp.284-287

に影印されている<sup>(5)</sup>。

①三本合装本Aに比べると、全体に碑面が少し荒れており、字が痩せたり、欠けたりしている部分がある。

また、後には、碑陰に刻されていたとされる衛夫人・褚遂良・虞世南・欧陽詢・薛稷・柳公権・李邕の小楷<sup>(6)</sup>は珍しい拓本である。

### ③ 唐雲藏単帖本B

唐雲(1910～1993年)の所蔵とされる単帖本で、8行ごとに分けて装丁されており、

『顔真卿小麻姑仙壇記』上海書店、1990年の後半に影印されている<sup>(7)</sup>。

②中国国家図書館蔵単帖本Aによく似た拓本であるが、もう少し全体が荒れて字が痩せたり見えなくなっている。

### ④ 三本合装本B

①三本合装本Aの次に装丁された拓本で、11行ごとに分けられて装丁されており、①三本合装本Aと同じ書籍に影印されている<sup>(8)</sup>。

損裂部分の状態はほとんど見ることは出来ないし、拓本の採り方自体の違いもあるであろうが、②中国国家図書館蔵単帖本Aや③唐雲藏単帖本Bと比べると、字がはっきりとしている一方で、やや太っている部分がある。後には、②中国国家図書館蔵単帖本Aの末尾に付されていたものと同じ衛夫人らの小楷の拓本が付されているが、②中国国家図書館蔵単帖本Aの拓本より損裂がある。この④三本合装本Bと同じところに採られた拓本ではなからうか。

### ⑤ 晋唐小楷十一種本

劉鶚(1857～1909年)の旧蔵で、9～10行ごとに分けて装丁されており、『書道全集』10、平凡社、1930年、pp.200-203に影印されている<sup>(9)</sup>。

④三本合装本Bによく似たところがあるが、少し字が欠けているところがある。

⑥ 晋唐小楷帖本

寧楽美術館所蔵の『晋唐小楷帖』に取められた拓本で、11～12行に分けて装丁されており、

『寧楽美術館蔵 宋拓晋唐小楷』寧楽美術館、1992年。

『季刊墨スペシャル』21、芸術新聞社、1994年、pp.28-29  
に影印されている<sup>(10)</sup>。

残っている字の状態は④三本合装本Bに似たところの多い拓本であるが、⑤晋唐小楷十一種本よりも全体に欠けた部分が多く、また損裂部分も大きい。

⑦ 書道博物館蔵本

張廷済（1768～1848年）旧蔵の拓本で、現在、台東区立書道博物館に所蔵されている。拓本が採られたまま切られずに装丁された拓本で、

『書道全集』10、平凡社、1956、図版42-43

中田勇次郎（責任編集）『書道芸術』4、中央公論社、1979年、図版34-35

中田勇次郎編集『顔真卿書蹟集成』4、東京美術、1985年、pp.41-43

『墨』65、芸術新聞社、1987年、p.26

『季刊墨スペシャル』第5号、芸術新聞社、1990年、p.75

黄宗義『顔真卿書法研究』蕙風堂筆墨有限公司出版部、1993年、p.215

『書に遊ぶ』9号、クリエイティブアートとまと、2001年、p.21

など、多くの影印が出されている<sup>(11)</sup>。

本来の石の形がわかる貴重な拓本である。字ははっきりとよく残っているが、中央下から右端中央への損裂部分は、これまでの拓本に比べて大きい。

⑧ 唐人真書本

三井文庫に所蔵されている『唐人真書』に取められたもので、11～12行ごとに装丁されており、

『原色法帖選』26「魏晋唐小楷集」二玄社、1987年、4頁分

『中国法書選』11「魏晋唐小楷集」二玄社、1990年、pp.64-67

黄宗義『顔真卿書法研究』蕙風堂筆墨有限公司出版部、1993年、p.215  
などに影印されている<sup>(12)</sup>。

南城本に見られた第22行目の一番下から第45行目のちょうど真ん中にかけて左上方に向けての大きな損裂などはなく、全ての字を見ることが出来るし、趣深い拓本である。南城本と同じように1面に刻され、そこから採った拓本を切り分けて装丁したと思われるが、第15行と第16行の間や第33行と第34行の間などに、南城本にはなかった行間の広がりがある。

⑨ 顔魯公叢帖本

所蔵先などは不明であるが、8行ごとに切り分けて、

『顔魯公叢帖』正集第5冊、上海求古齋書局、1934年  
に影印されている<sup>(13)</sup>。

古い影印なので精査は難しいが、途中の行間の広がりなど⑧唐人真書本に近い拓本と思われる。

⑩ 三本合装本C

④三本合装本Bの次、三本の最後に装丁された拓本で、8行ごとに分けられて装丁されている。①三本合装本A・④三本合装本Bと同じ書籍に影印されている<sup>(14)</sup>。

⑧唐人真書本、⑨顔魯公叢帖本に似た拓本である。ただ、拓本の採り方自体の違いもあるであろうが、全体がやや堅く感じられる。

⑪ 晋唐楷帖十一種本

陳介祺(1813～1884年)の旧蔵で、現在、北京故宮博物院に所蔵されている『晋唐楷帖十一種』に収められた拓本。10～12行ごとに装丁されており、

啓功・王靖憲主編『中国法帖全集』第16冊、湖北美術出版社、2002年、pp.392-395  
に影印されている<sup>(15)</sup>。

全体に少し字が太く、欠けたところなどもあり、また第17行目の下か

ら第30行目の上にかけて損裂しているが、やはり行間の広がりなど、⑧唐人真書本や⑨顔魯公叢帖本、⑩三本合装本Cに似たところのある拓本である。

⑫ 停雲館帖本

明の文徵明(1470～1559年)が刻した法帖で、嘉靖16年(1537年)に刻された巻1に収められている。広げた際にはほとんど余白無くつながるように刻されている<sup>(16)</sup>が、その折り目は15・18・13行で分けられており、

『影印明拓停雲館法帖』上下、北京出版社、1997年、pp.67-68に影印されている。「影印説明」によれば、首都図書館の蔵本とのことであるが、影印があまりよくない。ただ、拓本の欠損部分などは⑧唐人真書本などと似ているところがあり、また⑧唐人真書本に見られた行間の広がり、この⑫停雲館帖本の折り目部分に当たる。

⑬ 定本書道全集影印本

所蔵者などは不明で、11行ごとに装丁された拓本が

『定本書道全集』7「唐下」河出書房、1956年、p.75

藤原楚水『図解書道史』第3巻、省心書房、1972年、pp.630-631の2書に同じ部分が2丁のみ影印されている<sup>(17)</sup>。影印はよくない。藤原氏は停雲館法帖と記しているが、⑫停雲館帖本とは、行の分け方も拓本の状態も異なる。

⑭ 唐雲藏単帖本A

③唐雲藏単帖本Bの前に影印されている単帖本で、11行ごとに分けて装丁されている<sup>(18)</sup>。⑬定本書道全集影印本によく似た拓本であるが、やや字は太いように見える。

⑮ 顔真卿全集影印本

所蔵者などは不明で、14～15行ごとに装丁された拓本が

『名碑帖選 顔真卿全集』第2冊、興文社、1936年、pp.59-62に影印されている<sup>(19)</sup>。碑帖に濃く影印されていて字画が痩せているが、第15行と第16行の間に折れ目があり、第33行と第34行の間などに広がりがあるなど、⑫停雲館帖本に似た部分がある。

⑯ 書芸文化院蔵本

伝来などは不明だが、書芸文化院に蔵される単帖本で、9行ごとに装丁されており、

飯島春敬編『一碑一帖 中国碑法帖精華』第23巻「顔真卿 祭姪文稿等諸蹟」、東京書籍、1984年

飯島太千雄編『顔真卿大字典』東京美術、1985年、口絵に影印されている<sup>(20)</sup>。

大きな損裂はなく、細めの字の拓本で字画がはっきりしている。一面に刻されていたと思われるが、⑧唐人真書本、⑨顔魯公叢帖本、⑩三本合装本C、⑪晋唐楷帖十一種本に見られた、途中の行間の広がりはない。

⑰ 安岐旧蔵本

清の安岐(1683～?年)の旧蔵の単帖本で、10行に分けて装丁されており、

『中国国家図書館碑帖精華』第8巻、北京図書館出版社、2001年、pp.302-306

に影印されている<sup>(21)</sup>。

濃く採られた拓本で、大きな損裂はなく、比較的字画が太い。影印の解説は、『停雲館帖』の拓本と版式や字画が似ているとするが、⑫停雲館帖本とは違いがある。

⑱ 北京故宮博物院蔵本

伝来などは不明だが、北京故宮博物院に蔵される単帖本で、10行ごとに装丁されており、

朱関田主編『中国書法全集』第25巻「顔真卿1」、栄宝齋、1993年、pp.232-236

《顔真卿志》編纂委員会編『顔真卿志』山東人民出版社、1998年、pp.70-71

に影印されている<sup>(22)</sup>。

影印がよくないが、大きな損裂はなく、字画もはっきりしている。ただ、このたび収集した拓本の中には似た拓本はない。

⑱ 葉夢龍模刻本

清の葉夢龍（1775～1832年）が模刻した本で、11行ごとにはじめから分けて模刻されたものと思われる、

『中国国家図書館碑帖精華』第8巻、北京図書館出版社、2001年、pp.312-315

に影印されている<sup>(23)</sup>。

模刻本であるが、淡く採られた拓本で、字画も明瞭である。

⑳ 顔真卿志所収本

伝来などは不明だが、明刻とされる拓本で、8行ごとに装丁されており、

《顔真卿志》編纂委員会編『顔真卿志』山東人民出版社、1998年、p.72に影印されている<sup>(24)</sup>。

大きな損裂はないが、影印がよくない。

㉑ 台北故宮博物院蔵本

伝来などは不明で、1面に切れ目無く装丁されており、

国立故宮博物院編輯委員会編『院蔵碑帖特展目録』国立故宮博物院、1982年、pp.342-343

に影印されている<sup>(25)</sup>。

大きな損裂はないが、字画が鮮明で切れ味が鋭く、印象が堅く感じられる。

㉒ 書芸術全集影印本

西林昭一責任編集、鶴田一雄執筆『ヴィジュアル書芸術全集』6、雄山閣、1993年、p.105

に影印された拓本だが、縮小された部分図版なので、詳細は不明。

㉓ 蒯若木旧蔵本

清の蒯光典（1857～1910年）、続いて蒯若木が所蔵していたもので、1行20字、6行ごとに装丁され、

『中国国家図書館碑帖精華』第8巻、北京図書館出版社、2001年、pp.325-332

に影印されている<sup>(26)</sup>。



他の小字本より字が大きく、1行の字数は同じに装丁されているが、もとは1行の字数が多かったものと思われる。書風・字体はもとより、反復符号で書かれていた繰り返しを改めて漢字で書き、さらにその一部は繰り返しを忘れるなど、大きな違いがある。影印の解説では「中字本」とするが、例えば、浙江省博物館に蔵される南宋拓の『忠義堂帖』に取められた「中字本」とは、字体・書風・行間などいずれも異なっている。

## おわりに

以上、このたび収集し得た『麻姑仙壇記小字本』の拓本を概観してみた。ここまでで言えることは、同じ石から採られた拓本があまり無く、いくつもの翻刻が作られたと考えられるということである。このことは、その小ささから採拓や装丁のしやすさなどと相まって、『麻姑仙壇記小字本』の拓本は、想像以上に多数普及していた可能性を示している。例えば、『佩文齋書畫譜』巻44「書家伝」23に引用された、詹景鳳（1537～1600年）『詹氏小辯』（『明辯類函』）には、万暦年間（1573～1620年）の初めの人とされる程福生の書法について、  
篆法壽承、隸法徵仲、小楷法麻姑仙壇、又法黃庭、草法章草。

篆書は文彭（1498～1573年）を手本とし、隸書（楷書）は文徵明（1470～1559年）を手本とし、小楷は『麻姑仙壇記』を手本とし、草書は章草を手本とした。

として『麻姑仙壇記小字本』が学ばれたことが書かれているし、また、清の汪由敦（1692～1758年）の『松泉集』文集巻17「跋手臨大字麻姑壇記」には、  
世傳麻姑壇記、皆密行小楷。後讀楊東里集、知有大字本。

世に伝わる『麻姑仙壇記』は、みな行を詰めた小楷である。のちに『楊東里集』<sup>(27)</sup>を読んで、『大字本』があることを知った。

とあって、小字本が一般に広まっていたことが書かれている。同時期の帖学派の書家である張照（1691～1745年）の『天瓶齋書畫跋』には、巻下の「跋自臨麻姑壇」に『麻姑仙壇記小字本』のこののみが記され、さらに、王文治（1730～1802年）の『快雨堂題跋』「大字麻姑壇記」には、

麻姑壇小楷、傳刻極多、大書竟不可得。

『麻姑仙壇記小字本』は、伝わっている刻本は極めて多いが、大字本はほとんど見られない。

とかかれ、小字本が流通していたことがわかる。

顔真卿の作品の中では、『麻姑仙壇記』は宋代以降の人々がしばしば言及してきた作品であり、その中には、はっきりと大字本や中字本であることを記していないものも多い。そうした史料で見られてきた『麻姑仙壇記』の中に小字本がかなり含まれていたのではないかと考えられる。宋代以降の人々が日ごろ目にする『麻姑仙壇記』が、むしろ小字本である可能性がないかどうか、などを改めて検討してみる必要があると思われる。

#### 注

- (1) 顔真卿の現存作品の基本的な影印や解説については、拙稿「顔真卿現存作品基本図版解説等一覧稿」（『文教国文学』第52号、広島文教女子大学国文学会、2008年）において整理した。
- (2) 後述する⑦書道博物館蔵本による。
- (3) 張彦生氏は、最も古い拓本は上海の郭若愚の蔵本であり、石は「完整不断」であるとしている（張彦生『善本碑帖録』中華書局、1984年、pp.211-212）が、未見である。
- (4) 『麻姑仙壇記三本合装』は全体で、約108%程の拡大図版。『安思遠藏善本碑帖選』は第15行から第42行までは影印されておらず、縮小図版。『中国法帖全集』も第15行から第42行までは影印されておらず、約118%程の拡大図版で、しかも頁の前後があり、Aの拓本の影印は、pp.296-297、306、である。この『麻姑仙壇記三本合装』には、旧蔵者の何紹基の跋（『東洲草堂文鈔』卷10「題小字麻姑山仙壇記旧拓本」の八則の跋のうち、道光壬辰（1832年）、道光乙未（1835年）、丁酉（1837年）、戊戌（1838年）、咸豊癸丑（1853年）の年号が書かれた跋）5則が書かれているほか、何紹業の道光11年（1831年）跋ほか2則、吳榮光の道光乙未（1865年）跋、など多数の跋が書かれており、それらは裴景福『壯陶閣書画録』卷22に翻刻されている。なお、この『麻姑仙壇記三本合装』の閲覧と『壯陶閣書画録』の記載の存在については、菅野智明氏の御協力と御教示を賜った。さらに、氏の御教示によれば、文明書局の影印もこの三本合装本の影印であろうとのことである。記して謝意を表する。
- (5) 約72%程の縮小図版と思われる。
- (6) この小楷については、たとえば、季膺（1565年進士）「麻姑仙壇記重刻碑跋」（1585

- 年6月1日書、李光暎『観妙斎藏金石文攷略』卷11所引)や、趙均(1591～1640年)『金石林時地考』卷下「江西」に記載がある。
- (7) 全体。大きさの記載はないが原寸かと思われる。
  - (8) 『安思遠藏善本碑帖選』と『中国法帖全集』は、どちらも第23行から第44行までは影印されていない。『中国法帖全集』では、Bの拓本の影印はpp.300-303。拡大率は注(4)に同じ。
  - (9) 原寸。第10行から第18行と第28行から第36行の計18行分は影印されていない。
  - (10) 『季刊墨スペシャル』は、部分。『寧楽美術館藏 宋拓晋唐小楷』は、全体で原寸。
  - (11) 『書道全集』『顔真卿書蹟集成』の影印が原寸。『書道芸術』『顔真卿書蹟集成』の影印には張廷濟などの跋が影印されている。
  - (12) 『原色法帖選』と『中国法書選』は全体、原寸。『顔真卿書法研究』は部分、縮小。
  - (13) 全体、原寸。
  - (14) 『安思遠藏善本碑帖選』と『中国法帖全集』は第23行から第44行までは影印されていない。『中国法帖全集』では、Cの拓本の影印には頁の前後があり、pp.304-305, 298-299である。拡大率は注(4)に同じ。
  - (15) 全体。約118%程の拡大。
  - (16) 『季刊墨スペシャル』第21号、芸術新聞社、1994年、pp.108-111、に影印された顔真卿『祭姪文稿』など。
  - (17) 大きさの記載はないが原寸かと思われる。
  - (18) 全体。大きさの記載はないが原寸かと思われる。
  - (19) 大きさの記載はないが原寸かと思われる。
  - (20) 『一碑一帖 中国碑法帖精華』は全体、原寸。『顔真卿大字典』は部分。
  - (21) 全体だが、約72%程の縮小。
  - (22) 全体。『中国書法全集』は約144%程の拡大。『顔真卿志』は冒頭のみ約116%程の拡大、残りは縮小。
  - (23) 全体、原寸。
  - (24) 全体、縮小。
  - (25) 全体、わずかに拡大されていると思われる。
  - (26) 全体、原寸。
  - (27) 明の楊士奇(1365～1444年)の『東里集』のことと思われるが、『四庫全書』所収本(文集25巻、詩集3巻、続集62巻、別集3巻)では、「大字本」に関する記載は見あたらない。

〈付表〉『麻姑仙壇記小字本』関連著録簡目(民国期まで)

欧陽修(1007～1072年)「唐顔真卿小字麻姑壇記跋」『歐陽文忠公集』卷140

欧陽棐(1047～1113年)「小字麻姑壇記」、繆荃孫輯『集古録目』卷8

李之儀(?～1117年)「跋麻姑壇記」『姑溪居士文集』卷41

趙明誠(1081～1129年)「第一千四百五十一唐小字麻姑仙壇記」『金石録』卷8、「唐

麻姑仙壇記」唐杜濟墓誌」同卷 28

鄭樵 (1102 ~ 1160 年) 『金石略』卷下

周必大 (1126 ~ 1204 年) 「題趙鑑堂快閣詩」『文忠集』卷 19

『宝刻類編』(1225 以後成) 卷 2 「顏真卿」

王象之 (1196 進士) 『輿地紀勝』卷 35 「建昌軍」

王惲 (1227 ~ 1304 年) 「跋麻姑壇記後」『秋澗先生大全文集』卷 71

白珽 (1248 ~ 1328 年) 「跋顏魯公劉中使真蹟」『湛淵遺稿』卷下

柳貫 (1270 ~ 1342 年) 「跋趙承旨書顏魯公麻姑壇記」『柳待制文集』卷 19

陳鑑 (1415 ~ 1471 年) 『碑藪』「江西」

都穆 (1459 ~ 1525 年) 「顏魯公小字麻姑壇記」『金薤琳琅』卷 20

何良俊 (? ~ 1573 年) 『四友齋叢說』卷 27

王世貞 (1526 ~ 1590 年) 「玉板蘭亭叙麻姑仙壇記」『弇州統稿』卷 166

季膺 (1565 年進士) 「麻姑仙壇記重刻碑跋」(1585 年 6 月 1 日書)、李光暎『觀妙齋藏金石文攷略』(1729 刊) 卷 11 所引

張應文 (萬曆監生) 「顏魯公大字瀛州帖卷跋」、張丑『清河書畫舫』卷 5 上

趙宦光 (1559 ~ 1625 年) 『寒山帚談』卷上「臨仿四」

鄒鳴雷 (1566 ~ 1621 年、戴澳『杜曲集』卷 11) 『麻姑山丹霞洞天志』、李光暎『觀妙齋藏金石文攷略』(1729 刊) 卷 11 所引

于奕正『天下金石志』(1632 年自序) 「建昌府」

張丑 (1577 ~ 1643 年) 「跋古帖後」『清河書畫舫』卷 5 下

王應遴『墨華通考』卷 4 「建昌府」

安世鳳 (1613 年進士) 『墨林快事』卷 6 「小楷麻姑壇」

趙均 (1591 ~ 1640 年) 『金石林時地考』卷下「江西」

孫承沢 (1592 ~ 1676 年) 『庚子銷夏記』卷 6 「顏真卿麻姑仙壇記」

顧炎武 (1613 ~ 1682 年) 『金石文字記』卷 6

葉奕苞『金石錄補統跋』卷 6 「唐小字麻姑仙壇記」(葉奕苞『金石錄補』1680 序)

林侗 (1627 ~ 1714 年) 『來齋金石刻考略』卷中「麻姑壇記」

馮武 (1627 ~ ? 年) 『書法正伝』卷 9 「名迹源流」

王士禎 (1634 ~ 1711 年) 『蠶尾文集』卷 7 「跋大字麻姑仙壇記」

陳奕禧 (1648 ~ 1709 年) 『綠陰亭集』「題麻姑壇記」

『佩文齋書畫譜』(1708 年成) 卷 74 「唐顏真卿小字麻姑仙壇記」

楊寶 (1650 ~ 1720 年) 『鉄函齋書跋』卷 4 「顏真卿撫州南城縣麻姑山仙壇記建昌元

本」「建昌小字麻姑壇記」「再跋建昌小字麻姑壇記」「北京龍安寺麻姑壇記」「從弟石公斷本麻姑壇記」「家藏麻姑壇記」「別本小字麻姑壇記」「益王本麻姑壇記」

徐用錫 (1656 ~ 1737 年) 『圭美堂集』卷 22 「跋褚河南正書陰符顏平原小楷麻姑仙壇記 三条」

汪士鋐 (1658 ~ 1723 年) 『秋泉居士集』卷 2 「沈凡民印譜序」

何焯 (1661 ~ 1722 年) 『義門先生集』卷 10 「雜錄」戊子二月十七日条

王澐 (1668 ~ 1743 年) 『虛舟題跋』卷 10 「唐顏真卿小字麻姑仙壇記」

- 李光暎『觀妙齋藏金石文攷略』(1729 刊) 卷 11 「麻姑壇記」  
『(雍正) 江西通志』(1732 年刊) 卷 40 「古蹟」 撫州府
- 張照 (1691 ~ 1745 年) 『天瓶齋書畫跋』 卷下 「跋手臨麻姑壇」
- 汪由敦 (1692 ~ 1758 年) 『松泉集』 卷 17 「跋手臨大字麻姑壇記」
- 王昶 (1724 ~ 1806 年) 『金石萃編』 卷 96 「麻姑仙壇記」
- 錢大昕 (1728 ~ 1840 年) 『潛研堂金石文跋尾』 卷 7 「麻姑仙壇記」
- 朱筠 (1729 ~ 1781 年) 『笥河詩集』 卷 14 「顏魯公名印行」
- 王文治 (1730 ~ 1802 年) 『快雨堂題跋』 「大字麻姑壇記」 「麻姑壇記」
- 梁獻 (1730 ~ 1791 年在世) 『評書帖』
- 許儒龍 (乾隆年間的人) 「觀顏魯公逍遙樓碑作歌」 『国朝全蜀詩鈔』 卷 10
- 趙懷玉 (1747 ~ 1823 年) 『亦有生齋文集』 卷 8 「麻姑壇記小字本跋」
- 錢泳 (1759 ~ 1844 年) 『唐碑題跋』 「麻姑仙壇記」
- 洪頤煊 (1765 ~ 1833 年) 『平津讀碑記再續』 卷 1 「麻姑山仙壇記」
- 張廷濟 (1768 ~ 1848 年) 『清儀閣題跋』 「小字麻姑壇記」 「又」
- 瞿中溶 (1769 ~ 1842 年) 『潛研堂金石文字目錄』 卷 3
- 王鯤 『話雨樓碑帖目錄』 (1835 年刊) 卷 3
- 祁寯藻 (1793 ~ 1866 年) 『曼九亭集』 後集卷 11 「何子貞藏晉唐古墨四種次韻題後」
- 何紹基 (1799 ~ 1873 年) 『東洲草堂文鈔』 卷 10 「題大字麻姑山仙壇記宋拓本」 「題小字麻姑山仙壇記旧拓本」 「跋晏雲大字麻姑山仙壇記双鈎本」 「跋黃瀛石大字麻姑山仙壇記摹刻本」、同卷 24 「題白蘭言學使所藏宋拓小字麻姑壇記」
- 羅汝懷 (1804 ~ 1880 年) 『綠漪草堂文集』 卷 9 「麻姑仙壇記攷」
- 『(光緒) 広州府志』 (1879 年刊) 卷 98 「顏魯公小字麻姑壇記」
- 魏錫曾 (? ~ 1882 年) 『續語堂文存』 「書學緒聞」
- 楊守敬 (1839 ~ 1914 年) 『學書邇言』
- 葉昌熾 (1847 ~ 1917 年) 『奇觚頤詩集』 卷下 「題張弁羣宋拓四宝」、『語石』 卷 8、『緣督廬日記抄』 卷 16、丙辰五月廿七日条、丁巳閏二月十九日条
- 沈曾植 (1850 ~ 1922 年) 「海日樓書論」 『明清書法論文選』 所收
- 裴景福 (1854 ~ 1924 年) 『壯陶閣書畫錄』 卷 21 「宋拓魏晉唐小楷十一種合冊」、同卷 22 「宋拓小字麻姑壇記三種合冊」
- 葉德輝 (1864 ~ 1927 年) 『郟園山居文錄』 「与日本松崎鶴雄論文字源流書」
- 由雲龍 (1870 ~ 1926 年在世) 『定庵題跋』 「大小字麻姑仙壇記跋」
- 方若 (1869 ~ 1954 年) 『校碑隨筆』 卷 6 「麻姑山仙壇記」
- 歐陽輔 『集古求真』 (1923 年序) 卷 2 「小楷下」 麻姑壇記
- 張宗祥 (1881 ~ 1965 年) 『書學源流論』 (1921 年出版)